

目次

第一章 ヒューマン・リンクの授業アンケートについて	3
質問項目の設計概念	3
2007年夏の授業アンケートの傾向	7
第二章 授業アンケートの導入及び活用に成功する学校のリーダーシップ（管理職）	10
リーダーシップの考え方	10
組織文化とリーダーシップ	11
教員の心を動かすことが校長の仕事	11
校長・教頭・主要メンバーと一緒に話しを聞き議論する	12
インフォーマルなコミュニケーションを大切に	13
リーダーシップの8つのステップ	15
第三章 いかにして予習する生徒を増やしたか（英語科）	16
前回調査の結果	16
アンケート結果	16
陰山先生の授業の風景	16
陰山先生へのインタビュー	17
中前先生の授業の風景	18
中前先生へのインタビュー	20
第四章 どのような演習が効果的か（数学科）	22
前回調査の結果	22
演習に関する自由記述内容	23
問題量に対する評価と授業満足度の関係	24

まとめ	26
第5章 板書の何が課題になっているのか(国語科)	26
前回の調査結果	26
自由記述に見る頻出語句	27
板書	29
知識、テスト、生徒	30
まとめ	31
コラム 進学校に見る自由記述の特徴	32
板書	32
(生徒に)「注意をする」	33
雑談	33
不公平感	34
大学受験	34
体育	34
モラル	35
第6章 授業改善は客観的評価を見つめることから始まる(社会科)	35
前回調査の結果	35
アンケート結果	36
坂本先生へのインタビュー	36
第7章 リーダーシップとチームづくりが授業満足度を高める(理科)	38
出雲西高等学校のアンケート結果	38
校長先生から見た学校の変化	38
上代先生と内田先生へのインタビュー	38
第8章 「あなたはチームにどれだけ貢献できていますか」と問う	41
おわりに	45

第1章 ヒューマン・リンクの授業アンケートについて

質問項目の設計概念

授業を通じてどのようなことが生徒たちに実現できればよいのでしょうか。その授業がどのような教育目標や内容を持っているかは様々ですが、いずれの授業でも、それによって生徒の行動変容を促すことが目的とされていることは変わらないと思います。生徒が「授業を通じてその教科に関心を持った・意欲を持つようになった。」「関心・意欲が高まりその授業の予習復習をするようになった。」「自ら学習する時間が増えた結果、ペーパーテストの結果や技術・表現力が向上した。」このような生徒たちの行動変容を促す授業を実現することはどの先生にとっても共通の課題となるのではないのでしょうか。

この課題解決を実現するためには、生徒たちにとって「分かる授業」が実現しないといけないと考えられます。先生が話していることが「分かる」ということがなければ、生徒にとってはその授業は「意味を持たない情報」が延々と目の前を流れ、それを一定時間、机と椅子に縛られて聞かされる、という苦痛の時間でしかなくなります。

ところで、「分かる」というのはどういうことでしょうか。おそらくそれは、先生から提示された情報を生徒が「分かった」と感じることで、つまりは、その先生の話すことの「意味」について納得することでありましょう。そして「意味」について納得することというのは話す内容の文脈を頭の中に描くことができる、と言うことだと思えます。

「分かる授業」の生徒たちの反応プロセスを、東京工業大学名誉教授の坂本昴先生は「大学教育改善技法」（情報処理教育研究会報告 1992）において3つのコミュニケーションの分類とそれに基づく8つのステップで説明されました。その内容と、弊社の「授業アンケート」が質問項目として設定していることを合わせて整理したものが次の表です。

分類	主体	ステップ	ヒューマン・リンク「授業アンケート」の質問項目
a. 教師から生徒への情報伝達	教師	①教師の頭の中での情報処理	(検討中の項目) <ul style="list-style-type: none"> ・授業準備をどの程度しているか ・その単元について教科の中で研究や討議をしたかどうか
	教師	②教師から生徒への情報提示	<ul style="list-style-type: none"> ・学習目標の提示 ・話し方（明瞭さ、声の大きさ、説明、指示） ・板書（字の丁寧さ・読みやすさ、整理のされ方、量） ・テンポ（話、板書、授業展開） ・教材（教科書、教科書以外の教材、プリント） ・学習環境づくり（私語をさせない雰囲気、態度の良くない生徒や机に伏せている生徒への注意） ・大事なポイントを指摘する（話す内容、板書の箇所） ・「伝えよう」「わかってもらおう」とする姿勢・熱意 ・授業内容（難易度、幅広い知識の紹介） <p>生徒が教師からのコミュニケーションを肯定的に受け止める素地</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思いやりを感じる ・公平で信頼できる ・明るい、優しい ・言葉づかいや行いが適切である ・身なり、身だしなみに好感がもてる

表1 生徒と教師の授業内でのコミュニケーションと弊社授業アンケートの質問項目
(ページに収まるように表を修正)

	生徒	③生徒の情報受容	<ul style="list-style-type: none"> ・授業に対する自律的参加度(生徒の目標意識の度合により把握) ・授業中の姿勢、集中度
	生徒	④生徒の頭の中での情報処理	(既存知識との結合、小テストや定期テストなどによる確認)
b. 教師による生徒の行動の理解・評価	生徒	⑤生徒の反応	<ul style="list-style-type: none"> (理解や関心を示す身体行動) (質問や生徒同士の話し合いの場での反応)
	教師	⑥生徒の反応の診断	<ul style="list-style-type: none"> ・前回にやったことの確認、テスト ・質問しやすい雰囲気を作ってくれる ・質問する機会を作ってくれる ・生徒同士で話し合いをする機会を作ってくれる ・授業中に先生から質問されることが多い ・机間巡視することが多い ・問題(演習)をする機会が多い (検討中の項目) ・予習課題をしてきたかどうかの確認 ・ノート内容の確認
	教師	⑦生徒の反応の評価	・生徒がどの程度理解しているかを把握できている
c. 教師から生徒へのフィードバック	教師	⑧a 学習成果について正解	(テストの採点結果)

※分類は、「教師から学生へのKR情報の伝達」(KR: Knowledge of Results、学生に対してその行動の結果を知らせること)と表現されています。

※大学での講義を対象としているため学生と表記されています。

※図示されたものを文章化しています。

※①と⑦において教師は教育目標と内容を参照する、と図示されています。

上記の表に見られるとおり、弊社「授業アンケート」の質問項目は、
 ・「教師から生徒へ情報を提供する技術」

・「生徒の反応を受け止める技術」

・「授業の工夫(技術)」が受け止められるための「コミュニケーションが成立するための基本的な要件」

と分類することによって、授業満足度を高めるためにどのステップの改善が必要かを分析できるように設計されています。

ドバック		か誤りかを伝える、生徒の思考を要約して提示してその認識を深めさせる	<ul style="list-style-type: none"> ・質問に丁寧に答えてくれる ・ヒントをくれることが多い ・次回までにどのような予習をすればよいかの指示がある。(検討中の項目) ・考えが深まるような質問をしてくれる
	教師	⑧b 学生の行動や存在自体を教師が受け止め、認めているというメッセージを伝える	<ul style="list-style-type: none"> ・褒めてくれる ・叱るべき場面で生徒を叱る(検討中の項目) ・生徒の話をきちんと聞いてくれる。(うなづく、生徒の話している途中で先生が意見を挟むことなく聞いてくれる、学生の発言を反復したり引用する)

た・技術や表現力が向上した」という実感や、実際のペーパーテストでの点数が良くなった、という部分での「学力」に変化が生じるという構成です。そして、弊社独自の多要因間のクロス分析により、それぞれのコミュニケーションが生徒の学習反応のどの構成部分に影響を与えているかを明らかにし、授業改善に向けての課題を明らかにできるように設計されています。

2007年夏の授業アンケートの傾向

2007年度の傾向について考える際に重視したことが1つあります。それは授業アンケートを継続的に実施している学校で授業満足度が本当に向上しているかどうかです。授業アンケートの目的は言うまでもなく、授業スキルを高めることで生徒の授業満足度向上に結び付け、結果的に生徒の学習意欲や学力（技術）定着度を高めることにあります。授業アンケートが本当に先生方の授業スキル向上に結びつくものであれば、当然、継続的に実施されている学校では段階的に生徒の満足度向上が見られるということになります。

ただ、以前から他の書籍等でも紹介しておりますように、授業満足度の向上にはいくつかの段階があります。一般的なステップとしては「マイナス因子の削減による満足度の向上」「プラス因子の増加による満足度の向上」「プラス因子の共有化による満足度の向上」という三段階が考えられています。過去、多くの学校が取り組んでこられた「授業評価システム」ではこれらの段階をうまくステップアップさせることが難しいとされてきました。

第一段階である「マイナス因子の削減による満足度の向上」は多くの学校で実現するのですが、第二段階に進むことのできる事例が極端に少なかったのです。

これは多くの学校で実施してこられた「授業評価システム」が授業スキルの低い先生に対する「ショック療法」を目的としていたことに起因すると考えられています。即ち、「あなたの授業はこれだけ満足度が低いですよ」という事実を突きつけ、授業改善を促すという方法であったために、満足度を低くしている要因（先生の言葉遣い、読みにくい板書、不快な印象を与える言動など）を削減させる効果は見られましたが、プラス因子（よりわかりやすく説明するための方法、生徒のことを理解するための関わり方など）を増加させる効果はほとんど見られなかったわけです。これは比較的、満足度が高い授業を担当されている先生方の言動からも推察することができます。ショック療法をベースとした授業評価を導入しておられる学校の場合、これらの先生方は「私たちの方法（授業の進め方）が本校の生徒にマッチしていることが確認できました」と言って、あたかも授業評価はスキルの低い先生のためのものであると言うかのようにそれ以上の改善には取り組もうとされないのです。

ヒューマン・リンクの授業アンケートがクロス集計システム（生徒の満足度と授業スキルをクロスして相関を見る）を導入し、マイナス因子の削減だけでなく、プラス因子の増加に結びつけていただけるようにしたのは2004年度からでした。

そして2004年度から2007年度の四年間にかけて全く同じ質問項目でアンケートを実施していただいた学校が四校あります。その四校で生徒の授業満足度と先生側の授業因子（プラス因子とマイナス因子）の推移について調査をしたところ、全ての学校で授業満足度（全教科の満足度合計）が向上しているだけでなく、授業満足度と相関の高い授業スキルのプラス因子が増加していました。四校に共通して言えることは一年目から二

年目にかけてマイナス因子が減少し、三年目から四年目にかけてプラス因子が増加していることです。四校の内、二校ではマイナス因子の削減幅よりもプラス因子の増加幅の大きいという結果が出ています。これは非常に大きい意味を持つ出来事ではないかと考えます。

2007年度という年は授業アンケートがショック療法的なマイナス因子の削減だけでなく、満足度を高めることを目的としたプラス因子を増加させる効果があるということ、を理論だけでなく、実際に検証できた年となるのではないかと考えています。今後、更に同様の事例は増加するでしょうが、このような検証を続けることが必要なのではないかと考えています。

これ以外にも2007年度の実施校からは興味深いデータがいくつも報告されています。その中から主要教科の満足度と相関の高い授業因子について見ていきたいと思います。授業アンケートを実施した学校の中で2007年度前期に実施した学校のうち質問項目の内容の一致した学校(すべて高校)を対象に、これらの学校のデータを合成してモデル校をつくり、どういった「授業展開の特徴」が「授業満足度要素」と関連しているかを「教科について調べました」「授業満足度要素」というのは、授業に対する生徒の満足度を様々な視点から見たものです。多くの学校では、「関心」「理解」「意欲」「予習」「復習」「学力向上実感」といった項目を「択」により質問し、肯定意見を答える生徒の割合から否定意見を答えた生徒の割合を引いて算出します。「授業展開の特徴」とは、「板書」や「話し方」といった先生方が授業内で行う行為について20種類ほどについて、生徒が特徴と感じたものだけを回答してもらいその回答割合をみます。このとき、たとえば「板書が見やすい」「板書が見づらい」というように、肯定的な意見(プラス因子)と否定的な意見(マイナス因子)が対になるように設問しています。そして、授業内のどの行為が、どの授業満足度要素に影響しているかを見られるように設計しています。

今回対象となったアンケート枚数は次の通りです。アンケート実施回数、A校9回目、B校5回目、C校3回目、D校5回目です。

表2 モデル校の元となったアンケートの枚数

	理科	地歴公民	地歴	公民
6枚	1,465枚		1,717枚	276枚
8枚	1,310枚	2,089枚		
3枚	348枚		396枚	234枚
6枚	472枚	576枚		
3枚	3,595枚	2,665枚	2,113枚	510枚

モデル校について、まずそれぞれの教科の「授業満足度要素」に対して重要であると考えられる「授業展開の特徴」の上位5つを明らかにしました。次に、それら「授業展開の特徴」について、プラス因子を答えた生徒の数がマイナス因子を答えた生徒の数の何倍あるかを見ました。そして、重要な「授業展開の特徴」であるにも関わらずマイナス因子の割合が多い場合は課題があると解釈しました。このようにして各教科について分析

した結果は次の通りです。

国語科においては、

- ・「前向きな姿勢で授業を受けられるような工夫をしているかどうか」
 - ・「生徒が理解しているかをわかっているかどうか」
- という授業の特徴は全ての「授業満足度要素」に何らかの影響を及ぼしているという見取れます。しかし、「生徒が理解しているかをわかっているかどうか」という項目については、プラス因子とマイナス因子の回答数に大きな開きがないため、重要な項目であるにも関わらず、十分に工夫されていないということが分かります。

英語科においては、

- ・「授業の重要ポイントがわかりやすいかどうか」
 - ・「生徒が理解しているかをわかっているかどうか」
- という点がすべての「授業満足度要素」に関わってくることが分かりました。しかも、どちらの「授業展開の特徴」においても「△」、つまりマイナス因子の数が多いことが分かります。『わかりやすい授業』と『速い授業進度』は両立しない、という声がよく聞かれますが、いくら授業を先に進めても、生徒が「わからない」という状態が続けば、授業としては成立しない、満足できない時間を生徒が過ごすことになる、ということがこうしたデータからも言えると思います。

数学科においては、多くの「授業満足度要素」に関わってくる項目として、

- ・「授業のポイントがわかりやすいかどうか」
 - ・「授業に対する熱意が伝わっているかどうか」
- という点が特に影響してることが分かります。しかし、今回のモデル校においては、二つの「授業展開の特徴」ともにマイナス因子の数に比べてプラス因子の数が十分に多くなっている、つまり「先生方が熱心に分かりやすい授業をしよう」と心がけている」という様子が見て取れます。そこで、次に課題となってくることを見るために「△」のついている項目を見ていきますと、「生徒の理解度を確認しながら授業をしているかどうか」ということと、「予習復習をさせるために関係の強い授業展開の特徴」において十分な工夫がされているかどうか、という点が重要になってくるといえます。たとえば、「毎授業ごとの学習目標を提示している」「理解度を定期的に確認してくれる」という項目については、予習復習をさせるためにさらに工夫すべき余地が残っている、ということが今回の分析から読み取れます。

理科においては、

- ・「前向きな気持ちで授業を受けられる工夫がされているかどうか」

が、すべての授業満足度において大事になってくる「授業展開の特徴」として挙げられました。しかし、まだまだ工夫する余地がある結果となっているといえます。他の教科と比べて違ってきている点として、「話し方がはっきりしているかどうか」「板書の重要ポイントがわかりやすいかどうか」という点が上位項目として挙げられてきているということです。また、「生徒が理解しているかどうかをわかってくれている」という点が多くの「授業満足度要素」に影響しているにも関わらず、「×」の評価がついている点から、「生徒を置いてけぼりにしている授業が多い」という可能性が浮かび上がってきます。

地歴公民は、地歴公民と一つの教科として見る学校と地歴と公民を分けてみる学校がありましたので、「地歴公民」「地歴」「公民」の3つをそれぞれ見ました。3つに共通する「授業展開の特徴」としては、

- ・「生徒が理解しているかをわかってくれているかどうか」という項目が挙げられました。地歴のみで見ますと、「板書」の「重要ポイントの分かりやすさ」や「読みやすさ」が上位に挙がってきています。また、「学習目標の提示」や「理解度を定期的に確認しているかどうか」という項目も複数の「授業満足度要素」に関係してくることが分かりました。同時に、そうした「授業展開の特徴」においてはマイナス因子が多く、改善の余地があることがわかる結果となりました。公民だけでなく、「教科書以外の教材が活用されている」「態度の良い生徒を注意している」という項目が挙がってきます。他の科目に比べると、「その教員独自の視点での教材選び」や「教室内での生徒との関係づくり」が重要になる、つまり教員のある種のキャラクターの影響力が大きくなるという考察も成り立つような結果となりました。

第2章 授業アンケートの導入及び活用成功する学校のリーダーシップ（管理職）

リーダーシップの考え方

「学校はリーダーシップが発揮しにくい組織」という言われ方をされます。この場合の「リーダーシップ」とはどのような言動を意味する言葉なのでしょう。まず、「リーダーシップ」と「マネジメント」を分けて考える必要があると思います。「リーダーシップ」が「組織の進むべき未来の方向性を決め、ビジョンと戦略を描く。」「その為に、人間関係上の必要性、価値観、感情などに訴えかけ、モチベーションとエンパワーメントを推し進める。」「変革を成し遂げる能力」といったことを意味するのに対し、「マネジメント」は「目標を達成するための手順をくみため、経営資源を配分する。」「そのために、組織を編成し、人員を配置する。」「組織をコントロールすること」といったことを意味する言葉とされています (Diamond Harvard business Review Dec. 2002)。」の

二つの要素は補完関係にあると考えられます。学校ですと、校長・副校長または教頭や部長、主幹、主任といった方々がその役割を担当されるということになります。今回は、このように分けて考えた上で、「リーダーシップ」について考えていきたいと思えます。

組織文化とリーダーシップ

組織文化とリーダーシップの研究者であるシャインは、「リーダーシップとは、究極的には、新しい組織における文化の創造と既存の組織における文化の管理である。」（『企業文化』白桃文庫 2004）と言っています。文化という言葉は、実はよく使われる言葉であるために定義が難しいのですが、最近では、「強い文化が強い組織を作る」というように文化を一つの要因としてみるよりは、「人が自分の行動を一定のパターンにしたがって組み立てていく上での素材や道具が詰め込まれている『道具箱（ツールキット、ツールボックス）』としての一面を持っている。」とする考え方に移行してきているようです（佐藤郁也 山田真茂留 「制度と文化」 日経新聞社 2004）。つまり、「ある人が組織に入れば、一から10までその行動が決まってしまう。」という考え方はなく、その人が「この文化は受け入れられる」と思う部分を選びとって自分の言動に反映させていく、と考えられます。例えば、生徒と先生の関係でいいますと、『良い学校』に入ったから『良い生徒』になっていく」というのではなく、「この先生の言うことは聞く価値がある。」と思える場面がたくさんあるから生徒が言動を変容させていく、ということになるでしょう。同じように、管理職と先生方の関係においても、「この人の言うことは納得がいく」と思えたのであれば、その先生は自主的に様々な活動に取り組みようになるでしょうし、思えないのであれば、「言われたことを形だけやる」ということになると思います。そして、たとえば前者のようにアプローチできた学校では、校長が退いてもその勢いを止めることはないでしょう。一方で、後者の学校の場合は、校長が変わった途端に、元の組織風土に戻ってしまうかもしれない、ということになります。

教員の心を動かすことが校長の仕事

大阪のプロテスタント系の中高一貫校の校長先生は「先生が学校の掲げた教育理念を理解し、責任を持って仕事をしていかないといけない。ピラミッド型で責任を持って取り組む体制にしないといけない。でないと、トップが倒れたり、やる気をなくすと改革が頓挫してしまう。」とおっしゃいます。また、九州のカトリック系の中高一貫校の校長先生は「生徒を伸ばすにはどうすればいいか。校長方針が教師の行動を引き起こし、生徒に通じるまでに浸透していること。校長の言葉を覚えているレベルではない。」とおっしゃっています。どちらも、「教員の心を動かせるかどうか」が校長の大きな仕事であることを物語っている言葉といえます。

冒頭の定義でも挙げました通り、「リーダーシップ」とは、インフォーマルな人間関係に依存する部分が多い活動であるといえます。先に挙げたシャインの訳者であり、日

本における組織文化とリーダーシップの研究者である金井壽宏先生は「創造的な活動や変革は一人で起こせるものではない。必ず人と人のつながりがある。それを階層状の組織や権限によって実施することもあろうが、ネットワークを生み出し、それを活用するのは変革型リーダーシップの真骨頂だ。」（「リーダーシップ入門」日経文庫）と言っています。

ここまで読まれた方の中には、「自分は（自分の学校の管理職は）リーダーシップが弱いなあ。」と思われるかもしれません。しかし、行動科学における多くの研究者が、「リーダーシップは、生まれつきであるとともに習得されるものである。」という立場をとっています。また、企業だけでなく、学校やNPOといった組織までを含む組織経営の研究者であるドラッカーは、「リーダーシップは、カリスマ性でもなく資質でもなく行動である。」と言っています。つまり、意識して行動することで、「リーダーシップ」を発揮することができる、ということなのです。

このことを、授業アンケートの導入から活用成功する学校のリーダーシップ、というテーマに沿って考えてみますと、「いかに先生方に授業改善に前向きに取り組んでもらえる環境を作るか、その為に授業アンケートを導入することが効果的であることを納得してもらえるか」という部分が、その後の授業改善に向けた先生方の言動変容の度合に大きく影響してくる、ということになるかと思えます。そこで、そうしたリーダーシップの発揮に成功している、と考えられる校長先生のモデルを、私たちの接した先生の事例から描いていきたいと思えます。事例を見た後、「何を意識して行動すればよいか」ということをまとめてみたいと思えます。

校長・教頭・主要メンバーが一緒に話しを聞き議論する

群馬県にある中高一貫校で、2006年度に授業アンケートを実施しようという動きができました。この学校は、理事会の影響力も強く、理事会は人事考課制度に関心を持っている、という状況でした。こうした状況において、授業アンケートを強引に実施しようとしませんと、「人事評価に使われるのではないか」と後ろ向きな意見が出ることは必至でした。「人事考課」はその人の能力開発に焦点を当てた言葉ですが、「人事評価」となるとそこに給与面の調整を含む言葉となります。当時の風土は、「人事評価」という言葉に過敏に反応するものだったと言います。

そこで、当時の校長先生は、先生達にいろいろな授業アンケートに関するセミナーに参加してもらい、どのような考えで、どのように授業アンケートを進めればよいか、という情報収集をされたと言います。そして、「これは」と思うセミナーには、校長・教頭・主要メンバーと一緒に参加され、話を聞くようにされたということです。校長先生は、「全員で一緒の話を、一緒の場所で聞く、ということが大切だと思います。そうすると、セミナーの後でも、同じく『見聞きした』ことについて話し合うことができずるので、物事の進みが速いです。」とおっしゃいました。また、校長を退かれた後も、理

事をされている学校の校長先生に同様のアドバイスをされたと言います。

多くの学校において、セミナーは例えば生活指導のテーマのセミナーに生活指導主任が行って話しを聞いてくる、というようにどちらかといえば「情報収集」を目的として行かれることが多いかと思えます。そうして集めた情報を、職員会議で報告される、という形が多いと思います。しかし、これでは単に「情報」が組織に共有されるだけで、なかなか聞く人の心に響かないことも多いのではないのでしょうか。先ほどの話に戻りますと、「情報」は「形」を提示するだけで、その「価値」を説得する力を持たない、ということになります。しかし、人は結局「価値」の部分認めない限り言動を変えません。校長先生のおっしゃることは、セミナーと一緒にいき、同じ時間と空間の中で、同じものを見て、それぞれの「見方」を議論する過程に、その「価値」の部分に影響を及ぼす力が存在している、という点を指摘されているといえるのではないのでしょうか。

その後、先生がたから「ヒューマン・リンクのアンケートであれば納得できる」ということになり、弊社でアンケート業務をお手伝いさせていただくことになりました。先生がたが納得された最大の要因は、「授業改善を効果的に進めるためのアンケート」という位置づけを明確に示している点であったと言います。こうした経緯で始められた授業アンケートを一年間やってこられて、校長先生から「少しづつではあるが、教員の取り組み姿勢が変わってきた。」という実感を語っていただきました。

インフォーマルなコミュニケーションを大切に

修道中学高等学校の田原校長は180センチを超える大柄な風貌の方です。広島県にある200年を超える歴史を持つ進学校（男子校）のトップに立たれる際にまずされたことが、「地域二番手に甘んじている今の状況を打破して、地域一番の学校になる。」という明確なビジョンの提示でした。歴史が古い、ということはそのだけ人脈などの財産がある、ということですが、一方で強いしがらみも伴ってきます。まして、初めて修道出身以外の管理職、ということでも周囲の反発も大きかったことは容易に想像できます。そうした状況において、どのように組織に働きかけてこられたのでしょうか。

進路指導部長をされていた当時、学校には「何もしなくていい」というぬるま湯的雰囲気から抜け出すために、生徒に「順位」をつけようとしたところ、全員から反対されたそうです。「お前は修道出身じゃないからわかっていない。修道の原点に返れ。」と言われたそうです。そこで、仲間を作って、ご自身も多くの関西の学校へ見学に行く、ということをされました。そうした準備をされた上で、職員会議で『これが必要だ』と訴え、多数決でかろうじて採用されることになりました。そのあたりから良い意味で少しづつ職場内に亀裂が入ってきた、つまり動きが出てきたと感ずるようになったとおっしゃいます。

そのような状況で教頭になり、まず行ったことが校内のコンピュータのネットワーク化、ということでした。それまでに話には出てきたのですが進まなかった。これを進め

よう、とされたそうです。しかし、そこでも反発がでてきました。まず出てくるのがリスクの話です。「学校のデータが漏れたらどうする」「PCを使えない人はどうする」という声が挙がりました。そこで、一人一人に端末を持たせ、朝礼も掲示板機能を使ってPC上で行う、ということをしたそうです。PCの使い方はお互いに教えあって下さい、と強引に机の上に起き、朝礼の内容も「私は聞いていない」という声に対しては「掲示板で告知しています。」という対応をされたそうです。最初は文句が寄せられました。それが便利だとわかるようになり、今は非常に業務がスリム化したということです。模試の結果も履歴が見られ、ご自身の担当されていた東大現代文の講座をクリックすると、自分がいま教えている生徒がどれだけ成績を上げているかという変化も見られるようになりました。通知表もボタン一つで作成でき、教員は非常に楽になったということです。ここでの田原校長のポイントは、最初は強引に「形」を提示したとしても、その「価値」に教員が納得できれば、その取り組みは定着していく、ということだといえます。

実は、田原先生が教頭になられる際、校内ネットワーク化以外の仕事としてまかされたことが人事考課制度の検討でした。ご自身が過去に組合長を経験されたこともあり、組合の強さはよくご存知です。しかし、やがて県や国もやる。やたら書類の多い制度を押しつけられるよりも自分たちでやろう、これは自分たちを守る制度だ、と訴えられたそうです。そして、「授業が最も大切だ」という信念を込め、授業のポイントが一番高い制度を作られました。ここではテーマとずれますので詳しくは述べませんが、人事考課制度を組織風土変革につなげるためのポイントを抑えた運用をされています。ひとつは、全員が「評価をを目指す絶対評価であること、もうひとつはクレームを言える時期をきちんと作っていることです。つまり、「能力開発」と「コミュニケーション」に焦点を当てることだといえます。しかし、ここまでやっても大学進学実績の向上は実現されませんでした。そこで、校長になったとき、高い水準の学力再建、そのための授業改善の徹底に取り組みされました。

田原校長は、「いままでやってきた授業『評価』をより徹底する。そのために、アンケートを用いて、授業満足度と教員の取り組みをクロス集計して細かく見ていく。ただし、生徒に『評価』させているわけではない。これは調査であり、評価は管理職がする。その為に、管理職はほぼ毎日授業を見に行き、授業の観察記録をつける。」という位置づけで授業アンケートを導入されました。このように、アンケートと並行して、毎日「見て」「記録している」ということが裏付けとなり、授業改善に向けた管理職からの指導を先生方が受け入れられる素地が出来てきたと言えます。

授業アンケートという「形」に「意味」を吹き込むのは、管理職の言葉と行動です。修道中・高等学校の場合は、毎日授業観察の記録をつける、という行為を通じて、管理職の「授業改善」に対する真剣な姿勢が先生方に伝わっているのではないのでしょうか。

また、2007年夏に行った研修会も先生方に好評だったようです。まず先生がたに「一枚の紙に、「こういう生徒の取り組みで成果があった」または「失敗した」ということを書いていただいたそうです。そのあと10人ほどのグループに分かれ、司会を一人決めて書いたことを読んでいく、というものです。単純なことですが、この取り組みにより「あの先生がああいう考え方をしたのをはじめて知った。後で相談にいった。」という声もでてきたそうです。これは、個々の先生の持つている「暗黙知」が語られ、共有され始めた、ということを物語っていると考えるでしょう。

また、研修会の進め方も良かったのではないのでしょうか。「一人が発表している間は、他の先生は批判せず、口を挟まず、じっくり聴き合う、というルールで進められたそうです。こうした進め方は、コーチングというコミュニケーション・スキルという「承認」に該当するものと言えます。こうした研修会の進め方も、田原校長が「教員間のコミュニケーションはどうあるべきか」ということを非常によく理解され、意識されていることを物語っていると言えます。研修会について田原校長は、「我々が考え、その考えを先生方に少しやつてもらった。そこで、教員も少し心が動いたようだ」と振り返っておられます。この言葉からも、田原校長が「何をやるか」ということよりも、「どうすれば先生方の心を動かせるか」という点を意識されていることが分かります。

リーダーシップの8ステップ

ハーバード・ビジネススクールでリーダーシップ論を教えているコッター教授は、リーダーシップ行動を、「①危機意識を醸成する」↓「②変革チームを組織する」↓「③ビジョンを具体的に示す」↓「④変革に巻き込むためにコミュニケーションに腐心する」↓「⑤変革行動への権限を与える」↓「⑥小さな成功を実現させる」↓「⑦変革への歩みを減速させない」↓「⑧変革を促し続ける」という8つのステップに分けています。田原校長の言動を振り返りますと、この8つのステップに該当すると考えられる箇所が随所に見られるといえます。また、他校における授業アンケート導入から活用におけるリーダーシップをみますと、やはりこうしたステップを踏まえられることが多いようです。

管理職のリーダーシップについて見てきましたが、最近では、「誰もがリーダーシップを発揮する組織」であることが求められてきています。その時、まず各人に問われるのが「あなたはチームにどれだけ貢献できていますか？」ということですが、「一人一人が高いパフォーマンスを示しているも、それがチーム全体の貢献やメンバーの力量アップにどれだけ貢献しているのか、そのことを問い、そのために行動できる人間を増やすということが、今後の組織づくり求められるといえます。このことについては、また別の機会にお伝えできればと考えております。

第6章 いかにして予習する生徒を増やしたか（英語科）

前回調査の結果

前回（2006年12月）の調査では、英語科の授業満足度について、まず「意欲・関心・理解」を高める工夫をする事が必要であると結論づけました。そして、「小テストなどを通じて生徒の努力に対するフィードバックを行うこと」「15分以上の家庭学習を促す課題を計画すること」ということが授業満足度を高めるために必要であると提言いたしました。今回は、この「家庭学習を促す課題の計画」に取り組まれた事例をご紹介します。

アンケート結果

神戸山手女子中学校高等学校の6年生英語は、昨年の高6の結果と比べ、夏のアンケート結果において予習度指数（予習をする生徒の割合から予習をしない生徒の割合を引いて算出した指数）が30ポイント上昇しています（-100%～+100%の最大200ptの幅）。一方で復習度指数（復習をする生徒の割合から復習をしない生徒の割合を引いて算出した指数）に大きな変化はみられませんでした。つまり、生徒の予習の取り組みを増やすことにおいて、何か意識されたことが読み取れる結果といえます。

また、「関心度」で12ポイント、「学力向上実感」で12ポイントの上昇が学年として見られます。現高6が高1であったときの夏の結果と比べても予習度で9ポイント、学力向上実感で6ポイントの上昇が見られました。「学力向上実感」という指数が、他の指数に比べ向上させることが難しい指数であることに加え、通常、学年が上がると「中だるみ」減少が生じることを考えますと、その健闘ぶりがわかります。

こうした結果の背景にはどのような取組があるのでしょうか。授業アンケートの実施や特進コースの英語を見てきた中前先生と、神戸山手女子中学校高等学校に来て3年目ながら中前先生が注目するほどに活躍されている陰山先生の授業（いずれも高6 リーディング）とインタビューからその要因を探ってみます。

陰山先生の授業の風景

陰山先生の授業は、ご自身が担任をされているクラスで、授業の特徴として「幅広い知識を紹介してくれる」という点が高く評価されており、「熱意が感じられる」という項目と同じくクラスの半分の生徒がそのことを特徴として挙げていました。中前先生はこのクラスについて「先生との距離を近くとろうとするクラス」と言っています。高6の進学系のクラスです。授業は、木曜日の13時5分から始まりました。

チャイムが鳴る前には教科書が机にでており、起立、礼の号令の後には私語もなく生徒が教科書を開く。最初にゆっくりとしたスピードでネイティブのテキストの読み上げを

テープで流し、次に通常のスピードに戻す。そのあと、全員で区切りながら文を読み上げる。全体の声が小さくなる箇所は、「うん、ここやね。もう一回」と再読させる。全体を読み上げた後、生徒の名前を一人づつ呼び、区切りごとに一人づつ読み上げる。読み終わるたびに「はい」と、生徒に応えるように相槌を打つ。

こうした授業の流れは、「オーソドックス」な流れであるといえます。生徒も、私語をする事無く、読み上げる声に耳を傾けています。

全体を一人づつによって読みあげたあと、生徒の名前を呼びながら、日本語訳をさせる。英文を板書し、SVOCと品詞に分け、代名詞の指す言葉を確認する。教室の前半分ほどのところまで、机間巡視を行っている。テキストは「単位」に関する内容であり、その歴史的な部分に関する内容では「これ、世界史で習ったよね？」と生徒に問いかける。「ギロチン、ギロチン」「重税に耐えきれなくて」と、先ほどまでは消極的な姿勢を示していた生徒が発言し始める。騒がしい雰囲気になる前に、先生に注意されることなく鎮まる。

ここでは、授業の中盤に差し掛かったところで、机間巡視や、生徒が反応しそうな話題を取り上げている様子が見られます。

「述語、注意してください。」「これ、英検準 \times 級にできませんでしたね。」生徒に訳をさせながら、英検との関係づけをしている。「ペディって、ペディキュアのペディ。足。ムカデも日本語で百の足って書くのと同じで」「ええ、ムカデって百の足って書くの?」と生徒が反応する。「そうやで。ちなみに海の豚って書いて、。」と今まで消極的だった生徒が発言し始める。教室がその話題に集中し始める。「え、じゃあ、足が八つで蛸?」「え、それは、。」と生徒が答えに詰まったところで、「私、みんなみたいに漢検 \times 級とか持っていないから(わからない。)」と \times 先生が会話を拾い上げる。次回の範囲を示したところでチャイムが鳴る。

ここでも、陰山先生の話題提供により、クラス内での発言が促されている様子が伺えます。陰山先生は授業後のインタビューにおいて、次のように語っておられます。

陰山先生へのインタビュー

Q 「授業での重要ポイントがわかりやすいと感じさせる工夫は?」

A 「今日はこの単元をします、ということとは意識して伝えていきます。英検準 \times 級ででてきたとか、大学の入試に出てきたとか、どこで出たかを言って大事なところであること意識させるようにしています。」

○「前向きな姿勢で授業を受けられるようにさせる工夫は？」
▷「映画の話は良くします。映画は最新作を取り上げることが多いです。最近では、『ボーン・アルティメイタム』や、『They made me what I am』という文を取り上げ、関係代名詞が使われていることを説明しました。」

○「生徒の理解度の確認方法は？」

▷「読ませて詰まる単語は理解されていないと認識します。和訳させ、直訳に近い場合も内容がつかめてないな、と考えます。」「学期は一人一文を責任を持たせて訳させましたが、それがプレッシャーになると前回のアンケートでは評価があまり良くありませんでした。そこで、少しづつ区切って質問するようにしました。」

○「態度の良くない生徒にはどのように注意しますか？」

▷「集中力がないクラスの場合は、その都度指名するようにします。寝ている生徒はそばに行って注意を促します。」「質問はできるだけかみ砕いて、できるだけ生徒が答えられるようにします。」「私語がある場合は内容を拾ってから授業に戻ります。」

○「話し方や板書で工夫されていることはありますか？」

▷「できるだけ生徒にしゃべってもらうようにしています。」「また、板書は「授業」面を意識しています。」

中前先生の授業の風景

一方、中前先生のクラスは同じく高2の特進クラスです。やや先生と距離を置こうとする雰囲気のあるクラスで、英語に限らずどの教科でもクラスとの関係づくりは容易ではない、ということでした。しかし、中前先生のクラスでは、予習度で20ポイント、学力向上実感で10ポイント教科平均を上回っています。

事前インタビューでは、「このクラスは、本当に反応が薄く、他の先生もよく職員室に帰ってきて『あかん、討ち死にやった。』と、新しく試したことが失敗したことを話すことも多かった。自分のやり方は、ある意味『オーソドックス』なものではないが、自分では『このクラスをよくここまでにした』と思っている。」と語っておられます。

また、予習については「予習がまったく手に付かない生徒が多い。指名して答えさせるとそこで止まる。すると授業も止まる。『間違った答えをする』ことを異様に避ける。プライドが傷つく。プライドが傷つかないように嵐が去るのを待つ。」という状態だったということでした。

しかし、9月くらいに教材を変えたところ、予習をしやすくなった、ということでした。これまでは分量が多く、「特進ならこれくらいはしてもらわないと」という思いもあっ

て、昨年からの教材を使用していたということです。これを、桐原の「即ゼミ」にして、予習と授業がプリントでつながるように授業を設計しなおしたところ、予習をする生徒が増えてきた、ということでした。では、実際どのような授業をされているのでしょうか。クラスとの関係づくり、予習との関連の持たせ方、難しい概念の説明の仕方などに着目しました。観察した授業は、陰山先生の授業の後、木曜の14時5分からの授業でした。

チャイムが鳴る前、中前先生が生徒のところに行って話しをしている。チャイムが鳴り挨拶がすんでも、まだクラスはざわざわしている。「えっと、金曜（翌日）は単語テストをします。」「1987〜1996まで、10個。」「Dimension、難しいなあ」と独り言のようにつぶやく。「今日は、二月8日です。特に意味はないですけど。」と言うと、生徒から「〇〇さん、誕生日です。」と返ってくる。「ほんまあ、いくつ？」生徒が笑う。「バカな質問やった。」次第に生徒が静かになってくる。教科書を見だす。『即ゼミ』70ページから。用途、制限などって、難し。「独り言スタイルで進む。「じゃあ、ハッピーバースデー〇〇さん。」「テキスト290番、関学（関西学院大学）の問題やったと思います。」「ちよっとゆっくりかなあ。少しスピードあげますね。」

「関係づくりが難しい」クラスで中前先生は「独り言スタイル」で授業を進めていきます。しかし、それは「先生が一方的に話す」というものではなく、授業前に生徒と話していることや、自分の「独り言」に反応した生徒から「つながり」をつけていくスタイルであるといえます。こうしたスタイルは、「どうしたらこのクラスの生徒が授業に参加してくれるだろうか。」ということを考えてのことということでした。別のクラスでは、生徒と対話を重ねながら授業を進めるスタイルをとるのですが、このクラスでは「独り言」スタイルと生徒の状況に応じて授業スタイルを変えられているということでした。

「ちよっと時間とるのを承知で」と、「Though」や「but」の違いの説明をする。「You love me, but I do not love you.」「あく冷た。」という恋愛に関する例を挙げながら「but」が「等位接続詞」であることを説明する。授業前半に比べて生徒は聞く雰囲気になっている。「むしろ、though は in spite of で覚えるのが良いと思います。『だけれど』と日本語で覚えるのでなく。これは有力情報です。今日のお得情報ですね。」

こうした説明に見られるように、中前先生は難しい概念を、生徒がイメージしやすい例を挙げ、今説明していることが大事であるということを明示して説明している様子がわかります。

「えーっと、参考までに。ちよっと書いてくれませんか?」「それから13番、これちよっと聞きたい。」「うん。How で見なアカンな。副詞できてるときはhow系。」授業後、

生徒から質問を受けている。

授業の後半では、生徒も中前先生の話すことに反応するようになっていくことがわかります。では、実際授業において中前先生はどのようなことを意識されていたのでしょうか。インタビューからそれを見てみます。

「英語科の話し合いの内容を校長が拾ってくれた。放課後に補習をやってるんですけど、全教科を「から」までサポートすることはできない。補習が回らない。実際、日曜もやっている。すると、教科でコマの取り合いになる。こうした状況で改善するとすれば家庭学習しかない、という結論になりました。そこで、『いかに予習させるか』が重点課題になりました。これについては、本当に話し合いました。」

「とにかく、対クラスとしてみないこと。一人一人を見る。」「このやり方（生徒一人一人と対話する時間を授業内で持つやり方）の怖いのはエアポケットができるかもしれないこと。指名されない生徒がでないようとても気を使っています。」

まず前提として「予習させる授業」がテーマにあったことがわかります。また、この語りから、中前先生がなによりも「一人一人の生徒を把握し、つながりを持つ」ことを意識されていることが分かります。

中前先生へのインタビュー

Q 「授業で重要ポイントがわかりやすいと感じさせる工夫にどのようなものがありますか？」

A 「同じ範囲を2〜3回やれば力になる、という信念を持っています。でも、それだと授業が進みませんので、同じ範囲で3サイクルを回しています。2回分は学校で責任を持ちますが、3回目は生徒に任せます。実際、3回目をやってくる生徒はクラスの3分の1から半分くらいだと思いますが。」「教材は変えてよかったです。予習がしやすいものを選びました。」「先生であれば誰しも『こんなものもある』と言いたくなります。いろいろと紹介することが丁寧に対応することだと、自分も含めて思います。生徒はそれを求めているのでしょうか？」「知りたい生徒は自分で調べると思いますが。」「予備校的、と呼ばれるかもしれませんが、自分は『切る』タイプです。必要なところがどこかを絞る。漏れがあるというリスクがあっても。自分の役目はエッセンスを抜き出し、シンプルに整理することだと思っています。でするので、絞ることを意識しています。」

Q 「前向きな姿勢で授業を受けられるようにさせる工夫は？」

A 「今まではクラス対教師でした。しかし、生徒全体を見ている限りでは雰囲気は悪い

ままです。非常に個人的でも、とにかく『対』で話します。名前を呼び、そばに行きます。「時間で全員と話するのは難しいですが、今日はあの辺、と意識しています。最近話してないなあ、と思ったならそちらに行きます。英語に関することでも、英語と関係ない話でも、なるべく個人と個人の関係づくりをします。」

Q 「生徒の理解度の確認方法は？」

A 「予習をやっているかどうかは毎回きっちり全員をみているわけではありません。歩いているときにチラツチラツと見えています。やっていなければトントン、と机をたたき、『あれ？』と言うくらいです。しかし、『見られている』という意識はあると思います。『やらなくてもペナルティはありません。』と言っています。まあ、これは高2のこの時期だから（「やって当たり前」という意識があつて）できる（方法）なのかもしれません。」

Q 「教科書以外に使われている教材は？」

A 「今使っている教材で生徒は予習しやすくなったと思います。前のテキストはレベルが高く、生徒は予習しようと思っても鳥取砂丘に足を踏み入れたように、抽象的で、やってもやってもわからない、という感じだったと思います。」「配布プリントは、テキストの同じ範囲の配列を変えたものですが、これも附録のテストメーカーで作っていますので手間はあまりかかりません。」

Q 「態度の良くない生徒の注意の仕方は？」

A 「学校全体で授業が始まったら静かに聴く、という雰囲気があります。指示に従わない、私語をする、という生徒がいわゆる『態度の良くない』に該当すると思いますが、授業妨害を含め、そうした生徒はあまりいません。」

Q 「話し方や板書で工夫されていることは？」

A 「以前は特進だということどちらが構えていた部分があったと思います。ですので、無駄話をせずにスピーディーに進めていました。しかし、学習効果は上がりませんでした。予習をする生徒も多くなか、ただ授業が進んでいるだけです。そこで、一人一人と対話を成立させることを意識しました。そうすると、授業満足度が高まってきました。そのことに気付くのに2年かかりました。」「こうした生徒一人一人との関係を作っていく方法は、自分が教師としてある程度経験を積んでいるからできている、という部分もあると思います。生徒と適切な距離をとれるかどうか、ということですが、若い先生の場合は感情移入しすぎてしまうこともあるかもしれません。」「褒める、ということも難しいです。たとえば、クラス同士やクラスメイト同士でさまざまな想いをもっています。ですので、褒めるときはオチをつけておくのがよいですね。それも自分が道化になるの

が一番安全です。生徒の気持ちのはけ口を用意しておくことが必要だと思います。」

神戸山手女子中学校高等学校のストーリー

「予習度を高める、という方針を学校全体で決めた。」

↓「予習度を高めるために、何をすればよいかを柔軟に考えた。」

↓「新しいコミュニケーションの取り方や、新しい教材、新しい授業展開の形を試してみた。」

↓「結果、予習度や学力向上実感が高まった。」

第4章 どのような演習が効果的か（数学科）

前回調査の結果

前回調査（2006年12月）の結果では、数学において「分かりやすいと感じる授業」とは「なぜそうなるかというプロセスを生徒の理解度に応じて説明している授業（生徒が情報を消化しやすい授業）」であり、その為には「毎授業、何を学んでもらいたいかを強調し、それを実現させる指導方針をとった結果、生徒は情報を消化しやすくなった。」という知見を得ました。また、「雰囲気良さ」（生徒と先生の関係がよい、メリハリがある、私語がない）や「質問のしやすさ」（生徒が考える機会、発表する機会、生徒の意見を教員が受け止めることやほめることによる動機づけ）が「わかりやすい」という点で評価の高い授業に共通して見られた点や、「ノートやプリントなどで理解度を確認してくれる、生徒自身が理解度を確認できる。」「生徒が情報を消化しやすいような板書を心がける」という点が重要であることが指摘されました。

また、数学において理解度も学力向上実感も高い授業は、理解度は高いけれども学力向上実感は高くない授業に比べて「予習復習をする生徒の割合が高い」ということがわかりました。このことは、冒頭で申し上げました「意欲・関心・理解の向上」↓「学習習慣の定着（予習復習）」↓「目に見える学力の向上（学力向上実感、ペーパーテストの成績向上）」という因果関係の納得性を裏付ける結果といえます。

また、授業の特徴を見てみますと、「声が大きい」「授業の進スピードが速い」「態度の良くない生徒をうまく注意している」という評価が高かったことが分かりました。

ただし、いずれのタイプも「話し方がはっきりしている」「生徒がどの程度理解しているかをわかってきている」「板書の重要ポイントがわかりやすい」という特徴は共通して高いことがわかっています。

また、自由記述からは、「わかりやすい」「質問しやすい」といった「理解」に関する

意見の出現率や内容について「理解度も学力向上実感も高い授業」と「理解度は高いが学力向上実感は高くない授業」の二つのタイプに違いは見られないことがわかっていきます。そして、理解度も学力向上実感も高い授業においては演習に関する記述が比較的多く見られたことから、「授業内でのどのように演習をさせるか」という点を詳しく見ていくことが課題とされました。

演習に関する自由記述内容

今回のモデル校とした4校(2007年前期)において、自由記述意見は1年生で1,367件(2,532枚中 記入率54.1%)、2年生で607件(1377枚中 記入率44.1%)、3年生で136件(849枚中 記入率16.0%)でした。

今回テーマとなっている指数をみますと、理解度指数は1年32%、2年32%、3年34%、学力向上実感指数は12%、19%、27%でした。なお、モデル校で用いている授業の特徴に関する質問項目で直接的に演習に関するものは設定していませんでした。前回の調査においては、理解度及び学力向上実感の指数が一定の条件を満たす授業のみで自由記述意見を見ましたが、今回はより多くの意見を拾うために全授業を対象として自由記述を見ていくことにします。ただし、授業内での演習に関する記述のみに着目し、問題の解説や授業外の演習やフォローまたは宿題については今回の対象には含みませんでした。

「良い点」として挙げられた自由記述は3学年合計で1,672件あり、全記述2,110件に対して79.2%の割合となりました。そのうち、演習について「良い点」として挙げられた意見は全部で55件ありました。したがって、「良い点」として挙げられた全記述数の約26%が演習に関するものであったといえます。ただし、全記述数は「良い点」と「改善してほしい点」が併記している場合を、2件ではなく1件と数えています。

最も多かった意見は「問題の量が多い」「独自のプリントや問題集がある」で共に14件でした。「独自のプリントや問題集」は、生徒がその愛称や略称を記述することが多く見られました。

次に多かった意見は「1人ずつ問題を当てて理解しているかを確認してくれる・問題を解いている間に教室を回ってきているかどうかを確認してくれる」(10件)でした。これは、「わからないことがあるときに質問しやすい」「ヒントをくれる」という理由によるものでした。

その次に多かった意見は「定期的に小テストなどで理解度を確認してくれる」(6件)でした。これは、「先生が自分たちの理解度を確認しながら授業を進めてくれる」という理由と「自分自身の理解度を確認することができる」という理由によるものでした。

その他には、「問題を解く時間を十分にとってくれる」(6件)、「公式をつかった問題をしてくれる」「問題ができたらほめてくれる」「いろいろな例をだしてくれる」「目標

のページが終わったら自由時間にしてくれる」という意見がありました。

一方で、「改善してほしい点」として挙げられた自由記述は、学年合計で1,087件あり、全記述の210件に対して51.5%の割合となりました。そのうち、演習について「改善してほしい点」として挙げられた意見は全部で82件ありました。したがって、「改善してほしい点」として挙げられた全記述数の約34%が演習に関するものであったといえます。これは、「良い点」も「改善してほしい点」も、ほぼ同等の割合で演習に関する記述が出現する、ということを意味しています。

最も多かった意見は、「問題を解く量を増やしてほしい」(2件)でした。そのうちの件が高1の数学1及び数学2で寄せられた意見でした。次に多かった意見は、「考えている途中で解説を始めないでほしい・話しかけないでほしい・答えを書かないでほしい」11件の問題をじっくりやってほしい・わからないまま次に進まないでほしい」でそれぞれ1件でした。

その次に多かった意見は、「問題の難易度の幅を広げてほしい」「問題が出来ない時にけなしたり怒ったりしないでほしい」でそれぞれ8件でした。前者は、「簡単な問題にしてほしい」という意見と「応用問題もしてほしい」という意見がありました。いずれも数学1に対する意見でした。後者は、『は？』と言われると嫌な気持ちになる。』『はあ』(溜息)というのをやめてほしい。』という意見でした。また、「問題を解く量を減らしてほしい」という意見も8件ありました。

その他には、「練習問題の解説をきちんとしてほしい」「定期的に理解度を確認できるテストしてほしい」「問題文の条件はきちんと書いてほしい」「生徒を誰も当てず先生だけが解く授業はやめてほしい」「生徒が前にでて黒板で解くスタイルの授業にしてほしい」という意見がありました。

問題量に対する評価と授業満足度の関係

「演習を授業内でのように扱うことが効果的か」ということを考察するために、モデル校の自由記述のうち「演習」に関するものだけに着目した所、「良い点」においても「改善してほしい点」についても、最も多く意見が寄せられたのが「問題(演習)の量が多いので良い」「問題(演習)の量が少ないので増やしてほしい」という意見でした。

そこで、「問題量」に対する評価と授業満足度の関係を見てみることにします。「問題量」について書かれた授業の授業満足度を、「問題演習量が多いので良い」という意見のグループ(11件、数学1 6件 数学2 5件)と、「問題演習量が少ないので改善してほしい」という意見のグループ(12件、数学1 7件 数学2 5件)、でそれぞれ単純平均します。このとき、一つの授業につき複数の意見が寄せられても、単純平均する対象の授業満足度は一つのみとし、複数意見が生じたことによる加重平均は行いません。

例えば、1年A組の数学Iの授業に演習に関する「良い点」の記述が8件あったとしても、その授業の授業満足度は8倍せずに、1つの授業として平均する対象に加える、ということなのです。

平均の結果、「問題量が多いので良い」というグループの理解度が13%、学力向上実感が13%であったのに対し、「問題量が少ないので増やしてほしい」というグループの理解度は28%、学力向上実感は19%でした。

この結果から、問題量に対する評価で、「問題量が少ないので増やしてほしい」という意見のグループの授業満足度の方が、「問題量が多いので良い」という意見のグループの授業満足度よりも高いことがわかります。それでは、授業の特徴にはどのような違いがあるのでしょうか。それをまとめたのが以下の表です。

表3 問題演習量に対する評価と授業の特徴の関係

授業の特徴	問題演習量が多くて良い	問題演習量を増やしてほしい
自由記述件数	14件(12授業)	7件(5授業)
理解度指数	13%	28%
学力向上実感指数	-1%	19%
意欲度指数	19%	39%
関心度指数	15%	33%
理解度指数	13%	28%
予習復習度指数	-69%	-75%
(以下、授業の特徴として挙げた生徒の割合)		
授業を進めるスピードが速い	46%	22%
話し方がはっきりしている	29%	45%
声が大きい	33%	49%
板書の重要ポイントがわかりにくい	25%	15%
板書が読みやすい	15%	29%
授業に対する熱意が感じられる	22%	35%

(ページに収まるように修正)

上記の表から次のような授業像を描くことができます。まず、「問題演習量が多くて良い」という自由記述のあった授業は、比較的「授業を進めるスピードが速い」「板書の重要ポイントがわかりにくい」という特徴の見られる授業であることです。一方で、「問題演習量が少ないので増やしてほしい」という自由記述のあった授業は、授業満足度指数は予習復習度指数を除き、すべての指数で「問題演習量が多くて良い」という授業のグループを上回っています。また、比較的「話し方がはっきりしている」「声が大きい」「板書が読みやすい」「授業に対する熱意が感じられる」という特徴が見られる授業であることです。

このことは、「問題量が多くて良い」という自由記述での評価は、「ついていけない(授業を進めるスピードが速い)」という生徒を多く生む危険性を意味する評価でもあるといえます。「演習が多くて良い」という意見が寄せられた場合には、「演習に意識が向きすぎて、板書において重要なポイントをきちんと消化させられていないのではないか?」ということも自問すべきことを意味する結果であると言えるのではないのでしょうか。

一方で、「問題量が少ないので増やしてほしい」という自由記述があった場合は、おむね授業満足度は高く授業についてきている生徒が一定割合存在すると解釈してもよいのかもしれませんが。こうした意見が寄せられた場合は、生徒の理解度を見ながら、問題を解く時間や予習復習課題の分量を見直す必要があるのかもしれませんが。

まとめ

今回の調査では、「(授業内)演習」に関する記述のあった授業をグループにまとめ、それぞれのグループのアンケート結果の記述内容や数値をもとにどのような問題演習の在り方が効果的かを考えました。その結果、最も多い記述内容は問題演習の「量」であることが分かりました。しかし、必ずしも「問題演習量が多くて良い」と評価されている授業の満足度が高いわけではない、ということも同時に分かりました。今後は、授業担当者へのインタビューや授業観察を通じて、授業内の問題演習「量」に着目して、実際に授業でどの程度の分量の問題を扱うのか、それをどのように生徒に解かせるのか、という点を明らかにすることが課題と言えます。

第5章 板書の何が課題になっているのか(国語科)

前回の調査結果

前回(2006年12月)の調査結果では、授業スピードの影響は比較的小さく、一方で読みやすくポイントを押さえ復習しやすい板書の必要性がわかりました。また、現代文に比べ古典において「幅広い知識」を求める声が多く寄せられたことや、一定の分量の

宿題が必要であること、態度のよくない生徒を放置しないままにしないこと、けなしたり上からものを言うような適切でない言葉づかいをしないことが大切であることを指摘いたしました。そこで、今回の調査では、そうした傾向を定量的分析によって裏付けた後、重要と考えられるポイントについて詳しく自由記述を見ていくことにします。

自由記述に見る頻出語句

モデル校の3,384件(7,014枚 記入率8.2% すべて高校)の自由記述を、現代文と古典に分け、それぞれどういった語句が自由記述で多くでているかを比較します。「現代文」「演習国語」「国語総合」「国語表現」(以下、これらを「現代文」と表記します。)の自由記述意見は2,081件、「古典」「古典講読」の自由記述意見は1,303件ありました。「漢文」は今回のモデル校ではありませんでした)。このとき、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座(松本研究室)の茶筌システム「Net2」を利用しています。これは、入力文を単語単位に分割し品詞を付与するツールです。このシステムを利用して、名詞と判断された単語に着目し、それぞれの名詞の頻出度数を数えます。その結果が次の表です。

表4 国語科の自由記述に見る頻出語句

記述件数	良い点		改善してほしい点	
	順位	1,730件	順位	985件
声	1	98件 5.7%	5	44件 4.5%
話	2	87件 5.0%	10	30件 3.0%
字	3	74件 4.3%	2	75件 7.6%
説明	4	72件 4.2%	24	15件 1.5%
テスト	5	64件 3.7%	7	34件 3.5%
先生	6	60件 3.5%	23	16件 1.6%
板書	6	60件 3.5%	1	120件 12.2%
生徒	8	59件 3.4%	4	51件 5.2%
質問	9	40件 2.3%	27	14件 1.4%
黒板	10	39件 2.3%	3	72件 7.3%
重要	16	28件 1.6%	10	30件 3.0%

(表がページに収まるように修正)
「現代文」他

記述件数	良い点		改善してほしい点	
	順位	1, 132 件	順位	541 件
話	1	48 件 4.2%	16	10 件 1.8%
テスト	2	47 件 4.2%	5	29 件 5.4%
声	3	46 件 4.1%	1	51 件 9.4%
先生	4	43 件 3.8%	11	13 件 2.4%
字	5	31 件 2.7%	3	46 件 8.5%
説明	6	30 件 2.7%	12	12 件 2.2%
生徒	7	29 件 2.6%	7	25 件 4.6%
知識	8	28 件 2.5%		(該当なし)
プリント	9	26 件 2.3%	18	9 件 1.7%
板書	10	25 件 2.2%	2	50 件 9.2%
黒板	20	17 件 1.5%	4	33 件 6.1%

「古典」

※「授業」「こと」「ところ」など、キーワードに付随していると考えられる名詞は割愛しています。

「現代文」に関する自由記述をみますと、「良い点」として上位に挙がっているのは「声」「話」「字」「説明」「テスト」と言う名詞でした。一方で、「改善点」として上位に挙がっているのは「板書」「字」「黒板」「生徒」「声」という名詞でした。したがって、「現代文」の今回の結果は、前回の「読みやすくポイントを押さえ復習しやすい板書が必要である」という結論を裏付けているといえます。

「古典」に関する自由記述をみますと、「良い点」として上位に挙がっているのは「話」「テスト」「声」「先生」「字」という名詞でした。一方で、「改善点」として上位に挙がっているのは「声」「板書」「字」「黒板」「テスト」でした。したがって、「古典」の今回の結果も、前回の「読みやすくポイントを押さえ復習しやすい板書が必要である」という結論を裏付けているといえます。

また、「現代文」においては上位に入っていない「知識」という名詞が、「古典」においては「良い点」の上位に入っています。この結果は、前回の「現代文に比べ古典において『幅広い知識』を求める声が多く寄せられた」という結論を裏付けるものと言えます。

前回の調査における「一定の分量の宿題が必要である」という知見につきましては、今回の結果における「現代文」「古典」ともに、「良い点」「改善点」の両方において「テスト」という名詞が上位に挙げられていること関係している部分があるといえます。「テスト」が学習の定着や生徒自身がどの程度内容を理解・記憶しているかを測る指標として、生徒にとって重要なキーワードになっていると考えることができます。

また、「態度のよくない生徒を放置しないままにしないこと」「けなしたり上からものを言うような適切でない言葉づかいをしないこと」という前回調査の結果は、今回調査において「生徒」という名詞が「現代文」「古典」の「良い点」「改善点」の上位に入っていることと関係していることが考えられます。

そこで、これらキーワードについての記述をより詳しく見ていくことにします。

板書

板書に関する項目で、「良い点」として最も多く挙げられたのは「板書が丁寧・見やすい・きれい」(40件)でした。次に多かった意見は「分かりやすい」(26件)で、「ノートに取りやすい・後でノートを見ると復習しやすい・話しの流れが分かる」(7件)、「重要なポイントが分かりやすい」(9件)でした。その他には、「板書をする時間をとってくれる」「板書の量が少ないから話に集中できる・起きている人と寝ている人の差ができるので良い」がそれぞれ1件、「色をつけてくれる」「字が大きい」がそれぞれ3件でした。

板書に関する項目で、「改善点」として最も多く挙げられたのは「字が汚い、読みにくい」で38件でした。「字を崩して書かれると読み取れない」という意見もありました。

次に多かった意見は「板書する時間をくれない・消すのが早い」で㉓件、「板書が多すぎる」「わかりにくい」がそれぞれ㉒件でした。その他に、「重要なポイントや訳は板書してほしい」が㉑件、「字が小さい」「色を使って欲しい」がそれぞれ㉑件、「要点が整理されていない・思いつきで書いている・板書が長くてどこが大事かわからない」が㉑件でした。「板書の量が少ない」が㉑件、「板書の前に立つので見えない」「チャイムが鳴る直前にたくさん板書するので困る」がそれぞれ㉑件ありました。また、「意味のない板書はやめてほしい」「重要ポイントばかり板書するので後でノートを見てもわからない」「黒板の下に板書されると後ろの席から見れない」「ノートにとった箇所以後で付き足しされると、あとでノートが見つらくなるので困る」「板書の内容がノートに入りきらない」「矢印が多すぎてわかりにくい」「送り仮名がいい加減」「言葉づかいが難しい」「先生が左利きなので板書されているときに黒板が見えない」という意見がありました。

知識、テスト、生徒

「知識」に関する「良い点」の具体的な記述としては、「現代文」については「問題の解き方」「受験対策」に関連する内容が見られました。また、「国語総合」で「歴史の話をしてくれる」という意見が見られました。「古典」については、「豊富な知識を紹介してくれる」といった記述が多く、具体的にどのような内容が評価されているのかは今回はわかりませんでした。

- 「テスト」に関する「良い点」の記述としては、
- ・「漢字テストで漢字を覚えることができた」
- ・「小テストが定期テストに役立った」
- ・「豆テスト（小テスト）が自分の実力を認識するのに役立つ」
- ・「再テストで『がんばれ』と声をかけてくれるのが嬉しい」
- ・「単元テストで自分たちの理解度を把握してくれるのが良い」
- ・「過去問の解説を丁寧にしてくれる」
- ・「語句テスト・四字熟語テストが良い」
- ・「テスト問題とノートの中身が似ているので勉強しやすい」
- ・「テスト前に総復習をしてくれるので良い」という声があります。
- 一方で「改善点」の記述としては、
- ・「小テストの範囲を明確に伝えてほしい」
- ・「合格点を下げてほしい」
- ・「抜き出しの回答欄のマスが小さくて書きづらい」
- ・「定期テストの前にもどのような勉強をすればいいかわからない」
- ・「テスト前に急ぎすぎる」

・「テスト前に漢字テストなど、定期テストに関係ないことをしないでほしい」という声がありました。

「生徒」に関する「良い点」の記述としては、

- ・「生徒全体をまんべんなく当てること」
- ・「生徒をランダムにあててことは緊張感があって良いと思います。」
- ・「生徒とのやりとりがおもしろい」
- ・「生徒から反感を買わないので授業を乱す生徒もいなく、授業が受けやすい」
- ・「態度の悪い生徒をきちんと注意するのが良い」
- ・「寝ている生徒に注意するところが良い」
- ・「生徒一人一人を理解してくれる」
- ・「生徒の気持ちを考えてくれる」
- ・「生徒に公平」
- ・「生徒の指導がうまい」
- ・「質問を生徒にして考えさせようとするところ」

という声があります。

一方で「改善点」の記述としては、

- ・「わからない生徒に、『わかるでしょ？』みたいな感じはやめてほしい」
- ・「前の席の生徒ばかり当てるので、後ろの席の生徒が授業に参加していない」
- ・「生徒と話しをしながら授業を進めてほしい」
- ・「もう少し生徒の進み具合を見ながら授業を進めてほしい」
- ・「うるさい生徒をきちんと注意してほしい」
- ・「生徒の好き嫌いが激しい」
- ・「生徒の良し悪しを勝手に判断しないでほしい」
- ・「生徒の意見に耳を傾けてほしい」
- ・「生徒をバカにする言動が多い」

という声がありました。

まとめ

今回の調査では、前回調査における「読みやすくポイントを押さえ復習しやすい板書の必要性」という結論を、別のサンプル及び分析方法で得た結果をもとに検証しようとなりました。その結果、国語科において「板書」の重要性を再確認することができました。そこで、具体的にどのような「板書」が望まれているかを自由記述意見から詳しく見たところ、「読みやすさ」「丁寧さ」という基本的なポイントに最も意見が集中しました。また、どのように板書するかは、前回調査でも触れましたが、生徒がノートを見てどのように復習するか、ということにも関連してくることであるといえます。今後は、国語科において、どのような板書がされているか、どのようなノートをつけさせているか、

という事例を収集することが課題となるといえます。

コラム 進学校に見る自由記述の特徴

(コラムは枠で囲む フォントを落とす)

授業アンケートの中に自由記述で生徒の意見を聞こうとされる学校があります。比較的学力の高い生徒が集まる学校に見られる特徴として、文章の長さや論理性の高さが挙げられます。その意見には具体的にどのようなものがあるのでしょうか。また、そうした意見をもとにどのようなこと気をつけるべきなのでしょう。ある地方都市における進学校の自由記述に見られる特徴を拝見しましょう。今回は、2006年度のデータをもとに、教科を分けずに全体的な傾向のみを見ることにします。

板書

板書の字がきれいなのは、先生にとっても生徒にとっても大変なプラスだと思われます。しかし、いくら字がきれいでも、以下の要素が重なりと評価が下がる恐れがあります。

- ・板書が多すぎる
- ・字が小さい
- ・書くのが早すぎる
- ・ポイントがわかりにくい

ここで挙げた要素は互いに相関しているように思われます。つまり、板書の多すぎる先生は、書くのが早く、たいがい字が小さく、写すのが大変で説明が聞けない、又は説明不足になりがちで、わかりにくいという記述が見られました。理想の板書は次のようなものだと考えられます。

- ・字がきれいで要点がおさえである
- ・字の大きさや濃さ・量が適切である
- ・黒板の前に立ちほだからない
- ・板書の時間をとる
- ・授業終了直前の大量の板書をしない
- ・説明と同時に板書をしない

「字が汚い」という意見が寄せられますが、どちらかといえば「字が雑で読めない」という意味で書かれることが多いようです。たとえば、「ン」と「リ」、「シ」と「ツ」などカタカナが特に読みにくいという意見もありました。板書の字は、生徒が自分たちの書いたアンケートが先生に読まれているかどうかを測る目安になっているようです。何回アンケートをしても同様の意見が寄せられる、という事例もありました。

まとめますと、「板書が読みやすい」というのは、字がきれいでなおかつ、丁寧に楷書で書いてあり、整然としている印象が必要なようです。右上がりや右下がりを嫌がる記述も見られまし

た。また、英語と国語に関しては特殊な記述がありました。英語については「筆記体で板書するのはやめてほしい」・「プリントの答えや和訳を口で言うだけでなく、黒板に書いてほしい」、国語については「草書が読みづらい」等です。これら特殊な書き方についても留意しておく必要があるかと思えます。

「生徒に」「注意をする」

「注意」については、授業に集中できるかどうか生徒にとっても非常に大事なことのように、たくさん記述がみられます。特に「やさしい」という点では評価を得ている先生に対して、「やさしすぎる」「もっとうるさい人に注意を」「なめられている」「しっかりして下さい」などの適切な注意ができていない旨の記述がより多く見られました。若い先生の中には友達感覚になっていて、注意ができない先生もおられるようです。

また、ある先生は注意しないで、私語を上回る大きな声で授業を進めているので、声が大きすぎて耳が痛いという記述もありました。

注意については、前期と後期で比べても改善されたと見受けられる先生は、多くありませんでした。

注意する事は良いと考える生徒が殆どなのですが、注意が適切な状態であるか否かが問題です。逆効果となった場合の記述を以下に挙げます。

- ・ 注意しすぎて授業が進まない
 - ・ 言葉が不適切
 - ・ 声が大きすぎてびっくりする
 - ・ すぐたたく
 - ・ 些細なことで怒る
 - ・ 注意の仕方が遠回しで嫌だ。普通に注意してほしい
- バランスが重要だということがここでも伺えます。

また、生徒が居眠りをしている場合に触れておきます。居眠りをしている生徒は、「起こさないで欲しい」と考えていることが多いようです。眠くなる理由を「先生の授業が面白くないから」とか、「話し方や声が眠くなる」など先生のせいになっている記述が多くみられました。

一方で、居眠りしていない生徒からは、「いちいち起こさなくていい（時間がもったいない）」と「起こすべき」という記述が半々くらいでした。

雑談

授業中の雑談にも評価されるものと評価されないものがあるようです。

〔評価される雑談〕

- ・ 授業を明るくする
- ・ 眠い時間帯などにメリハリをつける時の楽しい（手短な）経験談

・休憩のための雑談

・マメ知識（授業に関連しているか、生徒のために必要と思われること）

〔嫌われる雑談〕

・ダジャレ・脱線話

・自慢話

・先生のプライベートをしつこく話すこと

過度の雑談は評価が下がる場合が多く、最小限に留める方が賢明かと思われず。基本的には授業自体が充実して分かりやすければ、雑談の必要はないようです。

不公平感

授業への不満として、「不公平だ」ということを挙げる記述は非常にたくさんありました。「差別したつもりはない・・・」と思っても、自分では気付かないうちに差別やひいきをしてしまっている可能性はあります。また、そう受け取る生徒側の問題もあるかもしれません。しかし、先生からの差別は生徒側からすれば、特にあって欲しくないものですので、生徒の反応も敏感です。記述を見られて初めてご自身の言動の影響を知り、愕然とされる先生も多数おられるのかもしれない先生。生徒の気持ちを汲んで、前期にあった不公平やひいきの記述が後期にはなくなっている先生が、結構おられました。

不公平や差別、ひいきなどを表わす言葉として「男ばかり・女ばかり・自分ばかり・できる子ばかり・前の席の人ばかり・特定の人ばかり」という「ばかり」表現があります。また、「他クラスと比べる」「ことも不公平感を生むようです。こうした意見に注意される事が、問題解決につながると思います。

良い点として「公平である」と記述も見られますが、そうした点を評価される先生は多くはありません。「生徒を公平に扱う」というのは簡単ではなく、よくよく意識しないと実現できないことなのかもしれません。

大学受験

大学受験は多くの高校生にとって重大な関心事であり、先生方も重点を置かれていることは予想できます。実際、大学受験に向けての対策をしてくれることを良い点として記述する生徒は大勢いました。一方で、あまりプレッシャーになるような言動に関しては神経質になる生徒もいると自覚して、慎重に言葉を発する必要があると思われる。「大学、大学と言うのはやめてほしい」「絶対合格してよとか言わないで欲しい」「先生が3年間ここまでがんばってくれたのに、落ちたらごめんなさい」等、ストレスを抱えた生徒にとってはやりきれないものがあると思う記述がいくつかありました。

体育

受験科目ではありませんが、どの学校の生徒も息抜きも兼ねて体を動かせる事を楽しみにして

いるようで記述も楽しいなども含めて良い点にたくさんある場合があります。

先生に対して生徒が求めている体育の授業は次のようなものでした。

- ・先生の手本(実演)がある
 - ・ゲームなどには先生も参加する時があってほしい。
 - ・一つの競技に執着せずいろいろな種目をやらせてくれる。
 - ・着替えの時間も考慮して終了する。
 - ・授業ができない状況(先生が休む・授業に遅れる)を作らない。
 - ・多少、自由にさせてもらえる時間があること(かといって、先生には怠慢な態度をしてほしくない。||ちゃんと見ていてほしい)
 - ・先生が明るく、声が大きく、ふざけている生徒に対しては注意をする。(体罰・暴言はしないで、指導力や人間性でまとめる)
 - ・できない(苦手な)生徒へのフォローや、うまくできるためのアドバイスがある
- 体育の授業はもとも好きだと答える生徒が多いですが、工夫されることでさらに生徒のチベーションを高めることができると考えられます。

モラル

自由記述意見を見ていますと、次のような生徒からの不満に出会うことがあります。

- ・暴力を振るう
- ・暴言を吐く
- ・生徒を見下している
- ・遅刻が多い
- ・休みがちである
- ・一人で授業をすすめている
- ・下ネタばかりをいう
- ・香水くさい
- ・タバコくさい
- ・数学の先生なのに計算ミスばかりする

こうした記述に接しますと、日頃先生から注意されていることをそのまま生徒が書いているような印象を受けます。聖人君子であることは難しいですが、学校という場所が、大人にとっても子どもにとっても、お互いが一人前の人間として扱われる場所であってほしい、と願ってしまいます。

第9章 授業改善は客観的評価を見つめることから始まる(社会科)

前回調査の結果

前回調査(2006年12月)の結果では、社会科及び理科においては「教員の好感度が

低いと総合評価も低くなりやすい」「好感度だけを高めても総合的に評価の高い授業にはならない」ということが分かりました。また、自由記述からは、授業満足度の高い授業では「熱意」「話し方」「板書」において肯定的な記述が多く見られることが分かりました。

アンケート結果

桜中学校高等学校（仮称）の坂本先生（仮名）は、2007年の夏に社会科学授業の研究会で発表をされました。そのレジュメでは、生徒による授業アンケート結果という項目において、2005年度では、「最初から親しみを感じられない科目」「板書の量が少ない」、2006年度では、『中だるみ』中³」「生徒の理解度をわかってくれない」と紹介されています。

実際に2005年度中³のある授業の結果を見てみますと、学校内の中学社会と高校の地歴公民の全授業から算出した平均値に比べ、関心度と理解度が低いことが見て取れます。その授業の特徴は、先生ご自身が表現されているように、生徒の「割が」「板書の量が少ない」ということでした。また、クラスの半分の生徒が「板書の重要ポイントがわかりにくい」という意見を挙げていました。

しかし、2007年度中³のある授業の結果を見てみますと、93%の生徒が「関心を持っている」と、91%の生徒が「わかりやすい」と答え、否定意見は3人前後と、2005年度から大きく授業満足度が改善していることが分かります。その授業の特徴を見てみますと、先生の授業のもともとの特徴であった「幅広い知識が紹介されている」という項目は2005年度と変わらず⁹割程度の生徒が評価しています。一方で、「板書の量が少ない」と答える生徒は「割を切っており、この点において坂本先生が大きく授業を改善されたことが見てとれます。また、「板書の重要ポイントがわかりにくい」という生徒も⁹割を切っています。

生徒の自由記述をみますと、2007年度では「ノートが書きやすい」「文がわかりやすい」「字がきれい」「序論本論結論がわかりやすい」という意見が寄せられていました。その他、2005年の授業と比べて「話し方がはっきりしている」「生徒が前向きな姿勢で授業を受けられるように様々な工夫をしてくれる」「教科書以外の教材がうまく活用されている」「態度のよくない生徒をうまく注意している」という項目を特徴に挙げる生徒も⁹割程度増えており、坂本先生が生徒に伝わる形で授業を改善されたことがわかります。

それでは、実際に坂本先生はどのような工夫をされたのでしょうか。それぞれの項目に沿って見ていくことにします。

坂本先生へのインタビュー

「どのように生徒の理解度の確認をされているのですか？」

▶「1つのテーマが終わることに10分間で400字でまとめるようにしました。4月にはギヤーギヤーと反対していましたが、今では『やらないの?』と生徒から言うようになっていきます。書くスピードも上がってきました。」「最初のアンケート(2005年度)では、『興味・関心』が低かったです。小学校の授業を考えて見ますと、地理や歴史は馴染みがあるようですが、公民の扱いが少ない、または、まったくないことも影響していると思います。」また、アンケート結果で『生徒の理解度把握』の数値が低かったので、「テーマごとにプリントにまとめさせ、理解度を把握する方式を考えました。」

○「教科書以外に使われている教材・プリントはどのようなものがありますか?」

▶「新しい学年が始まって落ち着くまでは講義形式で、教科書、副教材を使います。様子を見てビデオを使ったり、参加型の授業を取り入れていきます。」「今年度は、ホットシート、というものを用いてみたいと思います。この手法は演劇教育からきたもので、歴史の授業に取り入れられることが多くあります。たとえば、『ナポレオンについて調べてください』を生徒に課題を出します。すると、次の時間はその生徒はナポレオンになりきるのです。他の生徒から『あなたはなぜこの時、こういう行動をとったのですか?』と聞かれますと、ナポレオンになりきって答えるんです。その為には、ナポレオンのことを良く調べないとできません。この「公民版」を作ってみたいと思います。」

○「態度の良くない生徒にはどのように注意されるのですか?」

▶「隣の生徒と話している場合は、『お友達の人権を侵害している人がいます。』と言います。公民の授業なので(笑)。「また、4月のオリエンテーションで授業の進め方を説明しますが、『寝ている人は起こして“差し上げます”と言います。』。実際に机にうつぶせになっている生徒のそばに行って、起きるまではその生徒の隣で授業をします。本校では一年を通じてプールの授業があります。その後の授業ではどうしても疲れてしまいますので。」

○「話し方や板書で工夫されたことはありませんか?」

▶「後でノートを見て論旨展開が残るような板書を心がけています。そのノートを見て原稿用紙何枚でも小論文が書けるように、と意識しています。」「板書は消さないようにしたいので、「授業」板書と決めています。授業をよく聞いている生徒はそこに説明したこと、記録がついてきます。それを含めてノートにページ程度にまとまる分量にしています。」たとえば、時事問題を取り上げるときでも、テーマの背景にある流れ、要点、争点を整理して板書します。「アンケートでは『色チョークを使って欲しい』という意見が心人ほどありました。そこで色を増やすと今度は『見えにくい』という意見がでました(笑)。色の見えやすい順は白↓黄色↓赤ですけれど、赤色まで行くと見えない生徒もでてくるようです。」

坂本先生のストーリー

「関心・理解の結果が低かった。」

↓「結果を真摯に受け止め、理解度を把握するために『テーマごとにプリントにまとめさせる』という方法を考えた。」

「また、板書の見えやすさや、後でノートを見て役立つような構成を工夫した。」

↓「結果、 \circ 割の生徒が関心を持ちわかりやすいと感じる授業が実現した。」

第4章 リーダーシップとチームづくりが授業満足度を高める（理科）

出雲西高等学校のアンケート結果

出雲西高等学校ではこれまでに5回授業アンケートを行っています。最初に行った回は、学校全体の総合ポイント（全教科の計 \circ 種類の授業満足度指数の合計値）は-19ptでした。その時の全国平均が108ptでしたので、あまり良い結果とは言えません。

しかし、3回目のアンケートでは95pt、5回目のアンケートでは154pt（いずれも年度前期、夏に実施しています。）と、回を追う度に学校全体で授業満足度を高めておられます。こうした結果の背景には、永島校長先生の「授業改善こそ最優先課題である。」とする確固としたリーダーシップに加え、内田先生（前教務主任）及び上代先生（現教務主任）に見られるような、現場の先生方のリーダーシップが発揮され、「授業改善チーム」づくりが進んでいることが挙げられます。

どのような意識で授業改善に取り組まれているかについてお話を伺ってきました。

校長先生から見た学校の変化

学校の変化について、永島校長先生は次のように語ってくれています。

「授業アンケートをやったことから教科会の運営が変わってきた。それまでは教科書の範囲を決めるくらいだった。」「教科会に参加する際の意識が変わってきたと思う。」「時間割に週一回、教科会の時間をとってもらうようにしている。」「議事録は教頭の横に置いてあるファイルに綴ってもらうようにしている。」「

出雲西高校の変化の要因を、現在の教務主任である上代先生及び前教務主任の内田先生は次のように話されました。お二方とも理科の教員です。

上代先生と内田先生へのインタビュー

〇「授業での重要ポイントが分かりやすいと感じさせる工夫としてどのようなことをさ

れていますか？」

▶(上代先生)「高校化学は日進月歩、いや分刻みで変化しているんです。毎年定義が変わるので一昔のものは使えません。加えて、生徒も苦手意識を持っています。そこで、一番分かりやすい説明はどのようなかを調べるようにしています。化学に関する雑誌(「化学」化学同人、「現代化学」東京化学同人など)やインターネットの情報(日本化学会HP、不思議の国の化学HP、楽しい高校化学HPなど)を定期的に確認するようにしております。インターネットには、常に新しい説明の仕方や、実際にやってみた先生の評価なども掲載されています。高校の教科書だけに囚われての教え方よりも、大学での教えの方が系統だっついていて覚えやすい、と言ったこともあります。特に、有機化学分野は大学のテキストを参考に、システマティックに学習させる方が知識の定着や効率が良いように感じております。」(内田先生)「進学を意識していない生徒もいる。」

「生徒は基本的に勉強嫌い。なので、授業を通して楽しかったな、と感じさせるように意識している。和やかな笑いが起きたら『勝った』と思っている。」

○「前向きな姿勢で授業を受けられるようにさせる工夫にどのようなものがありますか？」

▶(上代先生)「とっつきやすくすることです。中学理科はいやだったかもしれないけれど高校化学は楽しいよ、というアプローチですね。まず自分が楽しむようにしています。また、生徒が多面的な見方ができるように意識しています。」(その他、生徒の自由記述では「誰が一番に解けるか」というような投げかけが良い、という意見もありました。)

(内田先生)「単元単元でインパクトのある話題を探す。何もない時は授業に関係ない時事ネタをもつてくることもある。1年生の1回目の授業では生徒一人一人の名前を呼ぶようにしている。これはどう読むのか、両親はきつとこういう想いをもってるんだろうな、と話す。まずこちらに目を向けてもらうことを意識している。」

○「生徒の理解度の確認方法は？」

▶「生徒の理解度については、授業の指導者に責任があると思っています。」「生徒に対して教科書の内容の9割の期限までにきちんと習熟をさせるという納期責任です。」

「具体的には小テストを単元の終わり毎に行います。」(生徒の自由記述では、「一人一人がわかるまで教えてくれる」という意見がありました。)

○「教科書以外にどのような教材やプリントを使っていますか？」

▶(上代先生)「書籍では『F. W. GRAHAM SOLOMONS ORGANIC CHEMISTRY (大学の学部生用の有機化学テキスト)』などで高校化学と関連深い部分を活用するようにしています。書店めぐりやインターネット検索はよくします。最近では『○○反応における水の反応』について検索し、最新の説明方法を入手しました。こうして仕入れた情報を基に

プリントを作ります。」「教科会を週一回開き、『おもしろい実験ない?』と情報交換しています。(〇)自身の専門が化学なので)生物を教えるときは生物を専門にやっている先生に教え方を聞きます。」(内田先生)「新聞で、『若年層にうつ病』という記事があれば、自律神経系の単元につなげて話す。目が痒くなったら『アレルギー』の単元。『なぜ目が痒くなるかわかるか?』と投げかける。こちらが精神的に余裕のある時はそうしたことができるが、余裕がないとできない。」

〇「態度の良くない生徒にはどのように注意をしますか?」

▷(上代先生)「授業規律がきちんと保っているクラスにおいて、個に集中すると全体が崩れますので、授業規律が一定レベルに保てる程度に注意し、あとで個別に呼び、指導します。逆に全体の雰囲気が悪い場合は、特に悪い生徒に厳しく指導することもあります。」(内田先生)「人間関係ができた上で『叱る』。状況を見ながら全体に喝を入れることもある。寝ている生徒をダシに笑いをとることもある。ただし、生徒がふてくされないように気をつけている。生徒のプライドを大事にする。」「昼食後は眠たくなるもの。こちらで教壇でストレッチをしてみせる。」

〇「話し方や板書ではどのような工夫をされていますか?」

▷(上代先生)「授業アンケートを実施して終わりでは生徒への裏切りになります。私はアンケートの結果を生徒に対して公表公開するようにしています。その上で、次の公約をします。実際の授業において、後ろに座っている生徒に『田中君(仮名)、声の大きさはこれくらいいいですか?』と聞き、アンケート結果に縛られている、と意識していることを示します。」(実際に生徒の自由記述で、「アンケート結果を真摯に受け止めてくれる」という意見が寄せられていました。)(内田先生)「高校の教科書は難しい。自分の体験からもノートを見て助けられた部分が多々ある。たまに自分の板書を教室の後ろで見えて満足する。ノートが参考書になるくらいノートを大切にしている。授業でもまず『ノートを出してみる』という。ノートチェックを学期に2回ほど行い、ABC評価をつける。教科書を読み返すよりもわかりやすい。新人の頃から16年間、毎年書き加えている。学部会(教科会)でもノートチェックをしようという意思統一をしている。」

〇「予習復習のさせ方で工夫されていることはありますか?」

▷(上代先生)「授業の終わりに次の授業内容におけるキーワードを投げておきます。例えば、『凝固点降下 ΔT=Kc』これを次回説明できるようにノートに説明を3行で書いてきなさい、と言います。次回、授業開始の分くらいで出欠と一緒にやってきているかどうかをチェックします。チェックすることが大切と思っています。まじめにやる人が報われるように。予習して理解した生徒は授業で『自分の考えた通り』と思いますし、予習では理解できなかった生徒も授業を通じて理解すれば授業に対して価値を見出

します。いずれの場合も授業で達成感を味わえます。」(内田先生)「元素記号の小テストなどを点数に入れる、と生徒に言う。満点だったら「点、」問でも間違えればゼロ点。」

出雲西高校のストーリー

「教科会は授業改善の話し合いをする場ではなく、事務手続きの確認をする場だった。」
↓「リーダーシップを発揮する立場にある先生が、『ノートチェックは教科全体で取り組みましょう』と働きかけたり、サブリーダーから『なにかおもしろい実験ありませんか』とベテランの先生のノウハウを引き出すように働きかけるようにした。」

↓「また、個人レベルにおいても、授業アンケートの結果を真摯に受け止め、生徒に結果を公表し、公約を宣言し、授業においても意識していることを示すようにした。」

↓「授業アンケートをきっかけに、どうすればよい授業ができるか、という意見交換をする場になった。」

↓「教科会が週一回開かれ、その議事録が教頭の横のファイルに毎回綴じられるという文化が定着してきた。」

第8章 「あなたはチームにどれだけ貢献できていますか」と問う

全員がリーダー

1960年代のアメリカで「生徒の家庭背景の違いにより学力格差が生じている」という報告(通称:コールマン・レポート)がされました。これを受けて、「学力格差を縮める学校」(「効果のある学校」)についての研究が始まり、ロナルド・エドモンズという研究者が「効果のある学校」の特徴として

- ・「民主的な教室の雰囲気」
- ・「強力な校長のリーダーシップ」
- ・「学校と地域社会との風通しのよい関係」
- ・「授業研究に熱心な教師集団の存在」という項目を挙げました。

この研究を踏まえ、日本版「効果のある学校」の研究者である大阪大学の志水宏吉教授は、「リーダーシップ」について、「教師たちに明確なビジョンを示し、自らが陣頭指揮をとることによって、教師集団の結束力・求心力を強めている。」という「校長のリーダーシップ」に加え、「チーム力を大切にする学校運営」に貢献する「ミドルリーダーのリーダーシップ」にも着目しています。これは、欧米の学校に多く見られるトップダウン式のリーダーシップがしばしば日本の学校の実情に合わない事例や、教育現場の

先生方が主体となって学校を引っ張っている事例に接した経験に基づくものだとおっしゃっています。

このように考えますと、リーダーシップとは「管理職」だけが発揮すべきものではなく、現場の先生方一人一人にも求められるものであると言えます。この考え方において、「リーダーシップ」が、「命令する人 対 言うことを聞く人」という関係ではないことは明らかです。それでは、「リーダーシップ」をどのように考えればよいのでしょうか。誰が実際のリーダーと言えるのでしょうか、それは、次の質問に答えていただくことで明らかになります。

「あなたはチームの成果向上のために、どれだけ貢献できていますか？」

いかがでしょうか。ここで、「チーム」という言葉のところに、「学年団」や「教科」という言葉を置き換えていただければよりイメージしていただきやすいと思います。この質問においては、先生方の年齢はもとより、どれだけ授業の名手であっても、生徒の心をつかむのがうまくても、それだけでは「リーダー」とは呼べない、ということになります。一方で、例えば経験年数が浅くても、「リーダー」であると考えられるかもしれませんが。「自分のことだけでなく、周囲の先生がたや学校全体のことを考え行動する」という意識は先生方全員の課題として捉えるべきものではないでしょうか。つまり、組織の成果をより大きなものにするには、「全員がリーダー」であり、「自分も主体」であるという意識を持つ必要があると言えます。

「授業改善」文化を伝承する

それでは、リーダーシップを発揮して何を実現すればよいのでしょうか。それは、第2章で取り上げましたシャインの言う「文化の創造と管理」ということになるでしょう。今回のテーマに即していえば、いかに「授業改善」文化を生み出し継承していくか、と言うことになります。組織文化の変容を見る上で、シャインは

- ・『レベル1：文物・人工物（目に見える組織構造及び手順）』
 - ・『レベル2：標榜されている価値観（戦略、目標、哲学）』
 - ・『レベル3：共有された暗黙の仮定（無意識の当たり前の信念、認識、思考及び感情）』
- の3段階のレベルがあることに気づき、より深いレベルの文化を理解し、扱っていかねばならない」と言います。これを「授業改善」文化にあてはめて考えれば、次のようなことになるかと思えます。

レベル1：文物・人工物（目に見える組織構造及び手順）

- シラバスや指導案、授業アンケート、授業風景を撮影したビデオ、授業改善計画など、およそ授業改善を目的として、目に見える形での取り組みが増えたかどうか

レベル2：標榜されている価値観（戦略、目標、哲学）

- 授業改善を目的として取り組んでいる内容の意義をどれだけ先生がたが解釈しようとし、理解が浸透しているか
- 教科会や授業アンケート結果の報告会、職員室での会話において、「この取り組みの目的とするところは何か」が意識されているかどうか

レベル3：共有された暗黙の仮定（無意識の当たり前の信念、認識、思考及び感情）

- 授業改善を目的として取り組んでいることがどれだけ「当たり前」のこととして定着しているかどうか、徹底しているかどうか
- 「何のためにこの取り組みをしているか」という意識が浸透し、「授業改善」することが「当たり前」のこととして根付いているかどうか

このような視点で「授業改善」文化を捉え、そのために「自分がどれだけ貢献できているか」と問いかけることが求められるのではないのでしょうか。

暗黙知を伝達する

「授業改善」という言葉は、具体的には次の3つの取り組みを意味しているといえます。

①すでに言語化されている、または形として確立されているスキルを身につけること

例えば、「百ます計算」や「向山式」など、すでに確立されていて、書籍やツールが紹介されているような手法、または他の先生が実践されていることを踏襲し、自分の授業に生かすことで授業満足度を高めることがこれに該当します。

②言語化されていない「職人芸」の内容（暗黙知と呼ばれています）を明らかにすること

「授業名手」と呼ばれる先生の授業を拝見しますと、当事者が「語る」以外にも、さまざまな工夫が見て取れます。それは、当事者にとっては「当たり前」になっているために当人の口からは語られませんが、実はその授業のバックボーンとして重要な意味を持つようなことである場合があります。そうした「語られない」工夫を明らかにし、「なぜあの先生の授業は生徒満足度が高いのか」を説明し、実践に生かすことがこれに該当します。

③新しい授業スキルを開発すること

一般に「研究授業」と呼ばれる行為の多くがこれに該当します。「こうすればこうな

るだろう」という仮説を設定し、実際にやってみた結果を検証することや、新しい教材やツールを使ってみることに、「総合学習」や「キャリア教育」など新しいテーマの授業実践においてその手法を確立しようとする取り組みがこれに該当します。

このうち比較的实践例が少ないのは②であるように思います。まず、自分の授業を公開する風土がない学校が多いことや、「授業名手」である先生が積極的にその「わざ」を伝承していかうとされる機会が少ないことなどが理由として考えられます。授業の「わざ」とは、書籍や研究会で紹介されたものをそのまま形をまねて実践したり、目新しい取り組みを実践すること以上に、「その場、その状況に応じて、最も適した対応を十分なスキルを持って実践する能力」を意味する言葉であるといえます。以前は、職員室がそうした能力を高める環境として機能していたといえます。先輩教員の後姿や日常の会話から後輩教員が学ぶという、「職人の世界」「師弟関係」に見られるような学習環境があった、と言われます。では、そうした「暗黙知」を明らかにし、「教員も学び成長する学校」を作るためにどのような取組をすればよいのでしょうか。その一つが次に挙げるような、授業アンケートを用いた授業改善のサイクルを回していくことが考えられます。

授業改善のサイクル

授業アンケートを活用した授業改善の流れは次の通りです。授業アンケートを出発点としていますが、どのような順番となるかは学校の状況によって変わってよいかと考えます。

① 授業アンケート

「生徒の授業満足度」と「教員の取り組み」を分けて設問した上で、両者の関係及び改善領域を明確化できるよう集計・分析します。

② 教員へのインタビュー及び授業観察

「高い授業満足度を示すクラスの授業担当者」「前回に比べてアンケート結果が良くなった教員」に対して、インタビューを行い、その先生が意識されたことを明らかにします。また、授業観察を通じて、インタビューでは語られなかったことを明らかにします。授業観察は、「授業の様子を録画したビデオを授業担当者を含めて観る」方法と、「教室内に同席して見学する」方法の二つがあります。前者は、当事者がビデオを見ながら、授業中は意識していなかったこと（「当たり前」になっていること、暗黙知）を明らかにするための取り組みです。後者は、ビデオでは捉えきれない教室の雰囲気や生徒の反応などを肌で感じるための取り組みです。

③ 授業改善の核となるチームの形成

管理職及び授業改善プロジェクトチームのメンバーでアンケート結果、インタビュー結果及び授業観察結果を踏まえて、お互いを感じたことを共有します。その上で、今後において「どのような領域の改善に意識を集中すべきか」、「そのために具体的にどのような取組の徹底を図るべきか」ということを討議します。こうしたことは、授業改善に向けて学校として取り組んでいることの意味を再確認し、授業改善の取り組みを継続する上での核を作るために必要となります。

④ 授業改善に向けた教員研修会の企画

教科毎にアンケート結果を共有し、次回目標値や改善領域を設定します。改善領域について授業で工夫していることを各先生に書いてもらい、その内容を教科の中で発表いただきます。このことで、「日頃は忙しいためになかなかお互いのやっていることを知らない」という状況を補完します。また、「じっくり自分の取り組んできたことを周りの人に聞いてもらう」ということで承認感が得られるようになり、先生がたの動機づけにつながります。

⑤ 他校での実践事例の収集

他校の実践にも目を向けることで、授業改善のための材料に広がりができます。実際に訪問し、その学校の雰囲気を感じ、ということも重要です。

⑥ 自校での実践記録の公表

自校の活動をまとめ紹介する機会を作ること、実践の励みになります。自校の取り組みが注目を集めれば、より強い動機付けとなります。

単に授業アンケートをとるだけで授業改善が実現している事例はありません。アンケートをどのように活用し、教科全体、学校全体の授業満足度を高めることができるか、そのために自分はどういうような貢献ができるのか、と考えることが必要となるようです。

おわりに

授業改善はみんなで連携して取り組みましょう

授業改善はミッション

学校の機能はいろいろ考えられますが代表的な機能は生徒の「教科学習の促進」でしょう。その機能を果たすのが「授業」であることはいまでもありません。ということは「授業の改善」は学校機能を高めることに当たるわけですから学校にとっては大事なことです。学校の使命（ミッション）をより多く果たす働きが「授業改善」です。

授業アンケートは教員の変化を要求する

教員の立居振舞の結果が生徒の内面に変化を与え、その変化が教科学習の促進につながると思われる。この考えを基にすて授業アンケートは行われています。つまり、生徒の教科学習が促進するような教員の教室での立居振舞はどのようなものが適切か？この問いへの回答を得るために行われるのが授業アンケートに他なりません。

教員の変化の源は目標とモチベーション

さて私達の立居振舞の変化は何によってもたらされるのでしょうか。脳の働いを参考にすればそれは私たちの「考え方、価値観」の変化で立居振舞は変わるといわれています。更にその「考え方、価値観」は私たちが持っている「アイデンティティ」で変わるといわれています。アイデンティティは「私はこんな人間でありたい」と思っている、その内容です。自己概念といわれています。自己概念はその人が持っているその人のビジョンに従うものです。どのような教員像をめざそうとしているのかで決まってくるのです。

自己概念を変え、考え方・価値観を変えないと立居振舞は変えられないと書きました。が、立居振舞ぐらい、意識を少しすれば変えられるだろう、という意見もあるかも知れません。確かにそういう考え方もあります。毎日の習慣を変えたらいつのまにか立居振舞が変わっていたという話はしばしば聴く話です。

いずれにしても立居振舞の変化は私達のやるべき8がなければかえられさいことは間違いないです。目標とする立居振舞を明確にし、モチベーションのレベルを上げれば実現するでしょう。

セルフモチベーションのポイント

目標の作り方は授業アンケートの結果が教えてくれます。ではモチベーションはどのようにすればレベルアップできるのでしょうか

モチベーションについての研究はもうだいぶ研究されてきました。神戸大学金井教授は最近「その人自前の動機付け要因というものがある」ともいわれています。これかデの研究成果を活用すべく、モチベーションアップのためのいくつかのポイントを拾ってご紹介しましょう。

① お互い承認しあうチームと学級を作りましょう。

お互い信頼し合い「一緒にいてくれてありがたい」という感情を共有しあえる教員チームを作りましょう。学年団や教科会で作れば良いと思います。生徒たちとの間では信頼しえる学級を運営しましょう。そこでは一人一人の意見が尊重されます。そんな空間は安心と自尊の気持ちを提供してくれます。

② 適切なビジョンを仲間と共有しましょう

目指すビジョンが明確にある、そして同じビジョンを目指す良き友人たちがいる、この2つもモチベーションを高めるポイントのようです。ビジョンは「こんな学校にしよう」「こんな教科会にしよう」「こんな教員集団を作ろう」等いろいろ考えられます。

ビジョンを共有するためには腹を割った話合いが不可欠です。共有するものが出来上がったらポスターにしたり、カードにして常に目に入るような工夫をしたりするのも良いかもしれません。

③ 仲間に貢献しまよう

助け合っている状態。これもモチベーションを高いものにしてくれます。常に周囲の動きを気遣い、自分にやれることがあれば積極的に実行する。「ありがとう」の感謝の言葉が多くなればモチベーションをますます高くなります。

授業のやり方を科学する、良い授業のやり方で再現性のある確かな方法を見つける、これを追求することで教員の皆さんのやりがいが高め、より良い貢献が実現するのをお手伝いする、これが授業アンケートが持っている重要な側面です。今回も前回「授業を科学する①」に続いて生徒の学習意欲を喚起する授業の進め方を授業アンケートの結果を集めて考察してみました。改善は限りの無い活動です。これからも先生たちのご意見をいただきながら授業アンケートの集約の中から科学を進めてゆくことを続けたいと思います。率直なご意見、そして貢献的なご意見を期待申し上げます。何卒よろしくお願いいたします。

(了)